

歴史の交差点

富士通FSC特別顧問 山内昌之



文筆家には、老年になっても物を書く人が多い。視力が衰え、時にペンや筆を握る力が弱くなっても、歴史や文学を書き続けた人は内外に珍しくなかった。ローマの大カトーは、紀元

ルタゴ政策では、第3次ボエニ戦争の発端となった「カルタゴ滅ぼさざるべからず」の有名な演説でも知られている。

フランスの思想家モンテーニュは、大カトーをあまり好きで

いらなかったらしい（「なにごとにも季節がある」―宮下志朗訳『エッセー』5収録）。

クセノクラテスという古代ギリシャの哲学者がいた。彼は若いぶん年老いてからも、熱心に学校の勉強をしたという。これを見たエウタミダスは、いまだに学習しているなんて、この人は、いつになったら、はたして知恵がつくのだろうかと言いつつ（同）。これはおそろくスパルタのエウタミダス1世のことだろうが、モンテーニュが依拠

本を書くには季節がある

しろ著録して子供時代に戻ったと辛辣きわまりない批判を浴びせたのである。

モンテーニュが言いたいのあれ、ものごとには季節というものがあるといふことだ。し

かし、何かを成し遂げるタイミングは青年期や壮年期だけとはかぎらない。どのような職業に就いても、物事は予定通りには進まないものだ。客気あふれる若者は、遅々としてはかどらぬ壮年の野心的な仕事の遅れを嘲笑うかもしれない。しかし、人生の円熟した高みから或る若者の仕事について、「功をあせりすぎる」と評した老学者を私は知っている。確かに、若者は準備を行い、老人はそれを享受すべきだという賢人の知恵こそ真理に近いかもしれない。それでも、人生がまもなく不慮の事態で中断しかねない季節ぎりぎりの限度いっばいに何とか間に合

う仕事があってもよいのではないか。

私はこうした思いから、ごく最近『將軍の世紀』上下（文芸春秋）を出版することができた。270年に及ぶ15代徳川将軍とパクス・トクガワナ（徳川の平和）を描きながら、現代につながる教訓を考えてみた。最晩年の偉人モンテーニュはいちばん長期の仕事でも準備に1年は超えないと語っている。凡人たる私の場合、老年に入ってから10年もかかったのである。人生の季節は、本の読み方にもまして本の書き方においても、個性の違いがよく出るものらしい。

（やまうち まさゆき）